

### NSD 赤穂新校にふさわしい学習空間に対する理解と検討

NSD の考えに基づいた「赤穂総合学科新校にふさわしい学習空間」について、以下の6つの視点から理解をまとめるとともに、そこから検討した建築のあり方を提示します。

#### A "メディアセンター、オープンスペース、ICTを生かしたフレキシブルで多様な学習空間"とは?

変化の激しい時代のなか、生徒自ら考え能動的に探究でき、時代や地域を超えた学びを深める学習環境が必要です。タブレットなどのICT技術はもちろん、情報の収集と共有、探究のためのメディアセンターの役割が大きいと考えます。特に授業間の教室移動が多い総合高校では「移動時間」が鍵となり、そのなかで身近にさまざまな情報に触れられる環境が大切です。

#### B "地域の学びの拠点となる"とは?

生徒が広い視野を持って学びを豊かに展開するには、まちな人が関わって学びの機会を育む「まちなまなび」のしくみ作りが必要です。さらに、まちなまなびのキーパーソンを含む地域の人が日常的に来校し、生徒との交流の生まれる拠点を設け、対話や協働の機会を増やすことが重要です。

#### C 総合高校で過ごす生徒の"学習空間"と"生活空間"とは?

総合高校の学習空間では、生徒の探求に沿った様々な学習スタイルや、様々な人数規模への対応が必要になります。そのため、NSDに基づく多様な学習空間(FLA など)に加え、普通教室自体もサイズを柔軟に変えられる計画とします。また授業間の移動が多いため、生徒の拠点となる生活空間が重要になります。空き時間の自習やクラス交流はもちろん、異学年の交流や部活動など複数の居場所を計画します。

#### D 総合高校を支えていく教職員の"執務空間"とは?

NSDの方針のもと教職員全員が集まれる大職員室を配置します。一方、生徒が気軽に相談できる雰囲気づくりや、カリキュラム・進路相談など生徒と教職員が密に話ができる場所(ある総合高校では、1回/月以上のカリキュラム相談を実施)など、総合高校の特性を考慮した執務空間・ラウンジの計画が重要です。

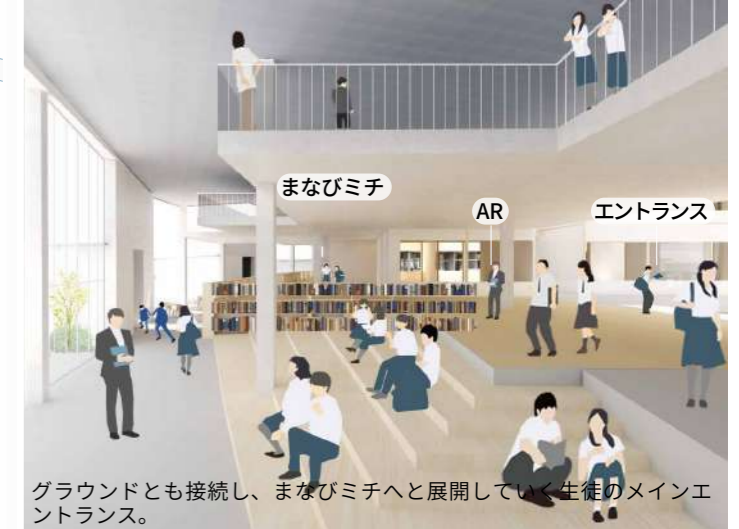
#### E 大学や関係機関企業と連携した"実証的な学び"とは?

これからの学びは、学校の中で完結せずに地域や社会の人との交流や協働を通じた実践的な学びが大切です。すでに赤穂高校が実施している地域の講師による探究授業を「まちなまなび」として発展させ、実社会の課題に向き合う機会を増やし、考える力を育てます。

#### F "近い未来、遠い未来を見据えた学びの空間"とは?

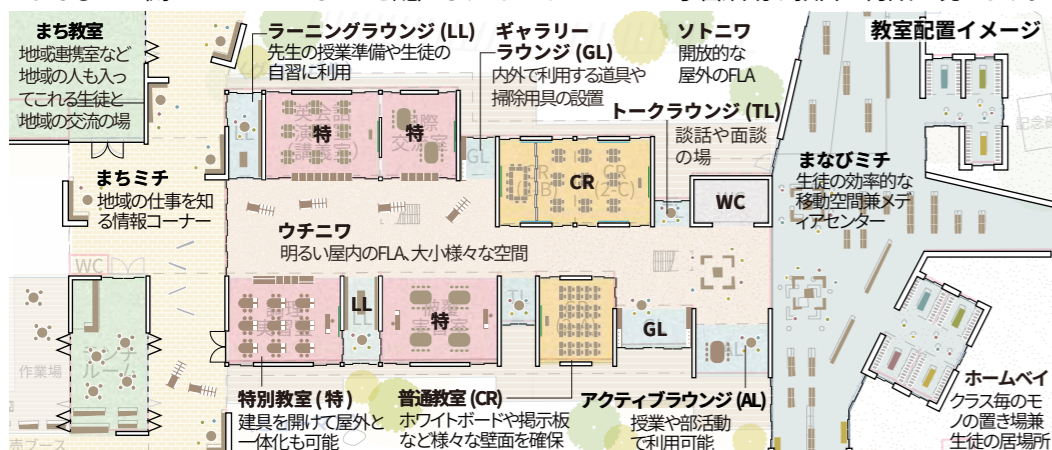
人口減少社会においては、高校の建設のみならず、まちの資源としての役割を念頭に置いた計画が重要です。具体的な構造やモジュールを検討し、中・長期的なフレキシビリティに配慮する計画とします。

### まちとつながり、さまざまな場所で学びが生まれる平面計画



### 2つのミチと連携し、内外に展開するさまざまな学習空間

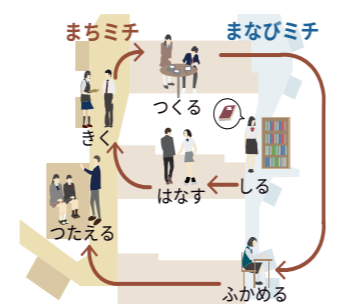
・2つのミチと関連して各教室等を配置します。まちなまなび側には地域連携が可能なLLや特別教室、まなびミチ側にはオープンなALを配置し、それぞれのミチに学習活動や教材の特徴が現れます。



### 循環を生むゾーニングと学びの幅を広げる多様なスケール

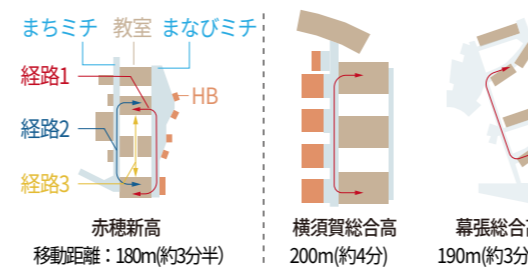
知識から対話、発信、創作をつなぐ学びの循環

・まなびミチから教室、まちなまなびへと、単発的な学びではなく、循環していく大きな学びをつくる計画を目指します。



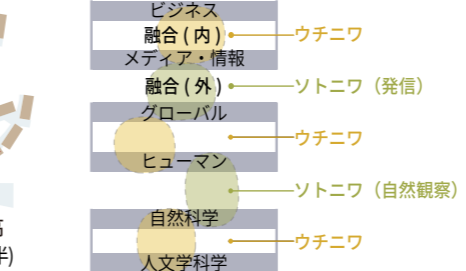
総合高校の特徴を考慮した教室間の移動

・教室棟の端から端までは約180m、ロッカーラウンジを経由しても約3分半で移動できる計画です。  
・メインの屋内動線であるまなびミチに加えて複数の経路を設け、各部へのアクセス性を高めます。  
・これまでに見学で訪れた総合高校の移動距離を念頭に計画しています。



系列の独立と融合を確保するゾーニング

・学びの6つの系列を専門ごとにまとめて管理を容易にしながら、そこにウチニワ/ソトニワを挟むことで、多様な活動の融合を可能にする計画です。



XS~XL 家具から教室まで

・総合高校の科目開講は、5名~学年単位まで多様な規模が想定されます。普通教室を間仕切りや繋げることでS,M,Lというサイズを設定しながら、可動式家具で学びのグループをつくるXSサイズ、ウチニワ/ソトニワ/まなびミチに大きく学びを展開するXLサイズまでを合わせて提案します。

